

毒島龍一先生を偲ぶ

島田晴雄
長谷川博
鈴木孝男
小川雅人



毒島龍一 先生

追悼の辞

島田晴雄

毒島先生がお亡くなりになったことは誠に残念でなりません。

毒島先生は、商業業績・地域流通に関する研究をご専門とされ、とりわけ、中小企業論、経営論、また地域経済等について深い学識を持っておられました。中小企業の経営者や地域商店街の方との深い交流とその熱心な活動により研究面での理論を構築されると共に、そうした活動を通じて経営者や商店街の方々との信頼関係を築かれました。そのことが、中小企業、地域経済に関する教育を行うにあたり、学生諸君が実地で様々な取組を行って学ぶことを実現させたのだと思います。

現在、千葉商科大学ではアクティブ・ラーニングを本学の教育の特徴、柱として掲げていますが、毒島先生の行われていたことは、正にアクティブ・ラーニングそのものでした。

近年では、本学と墨田区商店街連合会との産学連携協定に基づき、毒島先生のゼミの学部生及び大学院生が「下町人情キラキラ橘商店街」の活性化の一環として「キラキラ橘つまみぐいウォーク」を企画・運営しました。このことが商店街関係者、地元地域の皆様、商店街を訪れた皆様に大変好評を戴きました。学生諸君にとっても大きな学び、経験になると同時に励みになったと思います。

このように毒島先生は教育研究において千葉商科大学に多大な貢献をしてくださいました。毒島先生には心より感謝申し上げます、ご冥福をお祈りしたいと思います。

故毒島龍一先生へ

長谷川 博

毒島先生を偲ぶ会は、昨年暮れの学内で、しめやかにおこなわれました。実に多くのゼミ学生、院生、そのOB、教職員、ご友人、そして商店街代表が、先生のご遺影を前にして、ご生前を偲び、お別れを惜しみつつ献花を呈しました。後半から、司会とご遺族の接遇を務めさせていただきましたが、務まりましたでしょうか。

先生は、いつもお優しく、みなに温かく接して下さいました。先生たちとの共同研究では、その中に、私の連作がいまあるその第1稿を書くことをご寛恕下さいました。そして、先生は、イギリス留学からご帰国なさると早々、商学概論のテキストを一緒に書きましょう、と仰って下さいました。

それが、そう間もないうちに、先生は、みずからのご病状を明かされ、あのテキストの執筆は断念すると申されたのです。その時の、悔恨こもる思いが吐いてでた先生のお言葉や、そこからさえもはかりしれない先生の思いを、いまにして、ここに思っております。

その時から、しばらくして、堀之内貝塚公園の考古博物館へ参りました。先生と合同で、オリエンテーション期間中の研究基礎の学生たちを引率するためでした。その時の先生は、やがてご快癒するのではないかとまで、思いたいほどでしただけに、至極残念であります。

先生は、中小企業診断、商店街診断においても、数々の研究業績がごありでした。大学院においては、商学研究科の商学研究そして中小企業診断士養成コースを支えてくださいました。学部では、商店街活性化への参加型体験学習を通じて学生指導をもおこない、いまでこそそういうアクティブ・ラーニングの先駆けとなる「実践としての実学」を授業し、大学ホームページのスライダーも飾りました。

ゆえに先生には、「地域流通診断の理論と実践」という昨秋学期からの新設科目のご担当を是非にとお願いし、お約束を頂いておりました。誰もそうとは思っておりませんでした。まさに詮無きことながら、そのお約束を、先生がみずからは果たせぬこととなりました。それでも、末期の病床から、なおもそのことをご心配下さり、太田学部長にお電話を下さいましたことは、すぐさま学科長としても聞き及び、限りなく敬服いたしたところでございます。先生とご親交の深かった諸先生が、ご遺志を継いでこれらの授業をして下さっておりますので、どうかご安心ください。

千葉商大の最多学生の学び舎なれば、商経学部はいや栄えべし。すでにして、アクティブ・ラーニングは高校と大学の連携などへと広がりを見せておりますが、先生の足跡は、その礎ともなっているのです。

合掌

毒島先生を偲んで

人間社会学部教授 鈴木孝男

去る2014年9月14日に、商経学部教授の毒島隆一先生が逝去された。60歳という、今の社会ではまだまだこれからという年齢であった。

2011年から体調を崩され、ご病気と闘いながらもほぼ平常通りに大学に来て、講義やゼミでの指導をされただけでなく、東日本大震災の被災地支援ボランティア活動や商店街活性化などにも積極的に取り組んでこられた。先生のお人柄は温厚かつ誠実で、常に学生や私たち教職員に優しく親切に接してくれ、多くの学生から慕われていた。病のせいとはいえ、こうしたすばらしい先生を失ったことは私たち残されたものにとってはまさに痛恨の極みであり、残念でならない。

筆者は毒島先生が千葉短期大学から商経学部にお移りになってからのおつきあいで、特に先生が得意とする商店街に関して、一緒に活動する機会が多かった。ここでは主に学外での先生とのおつきあいに関する思い出を述べてみたい。

1 商店街での活動

商店街での活動においては、江戸川区のJR小岩駅前商店街での活動が思い出される。筆者は2004年以来、江戸川区から依頼されて小岩駅前通り美観商店街（通称フラワーロード商店街）について、活性化の取り組みを行ってきた。この活動において、毒島先生には2006年ころから一緒に活動していただけるようになった。

活動の内容は主として商店街でのイベントであり、花壇コンクール（5月）、サマーセール（7月、小岩あさがお市）、歳末セール（12月）などでゼミの学生と一緒に商店街で様々な取り組みをしていただいた。毒島先生は商店街の現状や店主の心情、行政の姿勢などについて専門的な立場から詳しく調査・理解され、様々な課題があることを十分に承知の上で商店街の活性化に積極的に取り組んでいらっしゃったのが印象的である。

これまでに毒島先生が小岩での商店街活動に参加した実績を振り返ってみると、ゼミ生が参加したのものも含めると、2006年から2011年までの5年間に及ぶ。この間、ゼミ生を伴って様々な物品販売の店や飲食店を出店したり、商店街が発行していたL2というコミュニティ誌の作成に協力したり、あるいは暮れの歳末大売り出しの際に販売の支援を行ったりと献身的に活動してくださった。

特に、先生のゼミ生の中に中国やベトナムからの留学生がいた時があり、彼ら（彼女ら）の特徴を生かして、中国の飲茶やベトナムの春巻きを商店街のイベントで作って町の人た



和市でベトナム人留学生とともに

ちに提供し、好評であった。写真は2011年7月に行われた「小岩昭和通り和（なごみ）市（現在勝手祭り）」での活動の様子である。この時は毒島ゼミのベトナムからの留学生がベトナム風春巻きを作って販売した。

毒島先生は商店街での活動に際して、単に学生をつれて商店街の現状を体験させるという狭い見方にとどまらず、「大学と商店街との共同活動を通じて地

域の発展に貢献する」という目標を掲げて、より高度な視点で活動を行っていたのが印象に残る。

その際先生が重視していたのは、次の2点であった。一つは商店街と住民、大学を中心としたコミュニティーに人を育てる機能を持たせることであり、もう一つは学生の主体性を尊重し確保することである。毒島先生は大学や商店街の都合を学生に押しつけるようなことは絶対にしてこなかった。そして、商学連携により持続力のあるコミュニティーの未来づくりを目指すという高い理想を掲げて活動してこられたのである。

2 被災地支援ボランティア活動

毒島先生とご一緒した活動でもう一つ忘れられないのが、東日本大震災における被災地支援ボランティア活動である。筆者は2011年9月に学生と岩手県を訪れ、その際大槌町で半日のボランティア活動を行った。当時は短期間で学生ができるボランティアが見つからず、見学先の企業の協力で大槌町の保育園周辺の除草という軽微な作業をさせてもらった。被災地の実情を直接目にする経験を得られたのは貴重であったが、学生達から見るともっとしっかりした活動をしたという思いがあり、それが強い不満となって残った。

こうした学生達の気持ちに押されて新しいボランティア受け入れ先を探していたところ、JTBコーポレートセールス社員で本学卒業生の伊藤洋一氏から大槌町吉里吉里地区でボランティア活動ができるという情報を得た。そこで、吉里吉里地区の漁業関係者と打ち合わせをした上で2012年9月に養殖ワカメ用のロープの清掃作業を行うことになった。

商経学部教授会でこの活動への参加を呼びかけたところ、毒島先生と橋本隆子先生から行きたいという申し出をいただいた。毒島先生については当時既にご本人からガンで治療中であることを聞かされていたので、ゼミの学生には参加してもらいが先生ご自身の参加についてはお断りした。しかし、毒島先生はどうしても現地に行かせて欲しいという強い



作業開始前に挨拶する地元の関係者。最前列の右から3人目が毒島先生、右端が橋本隆子先生

お気持ちがあったようで、その意向を否定することはできなかった。そこで、妥協案として、作業には参加せず、日陰の涼しい場所でできることをやってもらう、という提案をして受け入れてもらい、参加してもらうことにした。

我々のボランティアツアーは商経学部の毒島ゼミ、橋本隆子ゼミ、鈴木孝男ゼミの学生70人に教員3人を加えて2012年9月11日～13日の2泊3日で行われた。宿泊先として大槌から30Km程度北にある宮古のホテルを利用した。当時は震災から1年半しかたっておらず、大槌町や釜石地域では70人以上の人数を収容出来る宿舎がなかったのである。

初日、毒島先生は大学で会議があるということで遅れて新幹線で直接宮古の宿舎に向かい、2日目の12日から活動から参加してくれた。この時の活動の内容は、ワカメの養殖に用いるナイロン製のロープ(直径8センチ程度、長さ200メートル)に付着しているゴミ(ワカメ等の海草の根、貝殻など)を手でしごいて取るという少々きつい作業で、全員に厚手のゴム手袋を用意させて1日ひたすらロープ清掃を行った。

この作業を行った場所は吉里吉里漁港で、当時は震災の傷跡があちこちに残っていた。この日は9月としては気温が高く、30度を超える炎天下での作業になった。そこで毒島先生には建物の中に入っていて欲しいと何度もお願いをしたが、その都度「わかった、わかった」といいながら最後まで学生と一緒に作業を行い、日陰で休憩したのは昼食の時だけであった。

作業は70人を越える学生と教員で100本もあるロープの清掃に取りかかったが、結局70本程度しか終わらなかった。それでも地元の漁業関係者からは感謝の言葉をいただいた。

当日の作業の様子はその日のNHK岩手放送局のテレビやラジオのニュースで県内に放送され、それを聞いた釜石市在住の千葉商科大学卒業生の菅原章さんが差し入れを持って駆けつけてくれたり、翌日帰り際に立ち寄った仮設商店街で放送を見た店の方から感謝の言葉をもったりといった反応があった。

12日は朝から一日中厳しい太陽の日差しのもとで作業したので、学生の中に火ぶくれを起こして具合が悪くなった学生がいた。その学生がたまたま毒島先生のゼミの学生であったので、先生は心配して翌朝学生を宮古市内の病院に連れて行き、手当てをしてもらった。その後先生は我々のバスと合流することができなかったのも、そのまま新幹線で学生を伴って一足先に戻られた。学生の健康を第1に考え、ご自身の体のことは後回しにされる先生の献身的な姿勢が際立った行動であった。

3 イギリスでの調査活動

その他、毒島先生とはイギリスでの調査でもご一緒した。2008年2月6日～13日まで、ロンドンを中心に、ポーツマスやミルトンキーンズも訪れて、起業教育とタウンセンターマネジメント(TCM)の調査を行った。その際、筆者が2002～2003年に在外研究員として滞在したキングストン大学SBRC(Small Business Research Centre)にも立ち寄り、その訪問がきっかけとなって毒島先生は翌2009年から1年間、同SBRCで客員教授として研究をされることになったのである。

イギリスでの活動で印象に残っているのが毒島先生の英語でのコミュニケーション能力



2008年2月11日、キングストン大学にて。左端が毒島先生、隣が筆者、右から3人目がSBRC所長のR.Blackburn教授、2人目が江戸川区職員柴崎和重氏、右端が現CUCサポート金子章一氏

の高さである。この時はロンドンのATCM (Association of Town Centre Management) やロンドン近郊やポーツマスの市役所等を訪問して情報交換を行ったのであるが、イギリス人との英語での会話にはほとんど困らないようなレベルであったので、驚いた。今となっては日頃の努力の成果が現れたのではないかと推察するほかはないが、日本にいて外国人とのコミュニケーション能力を高めるには、かなりのご努力があったのではないと思われる。

毒島先生のお人柄で思い出すのは、懇切丁寧、礼儀正しさ、思いやりということにつきる。先生がお亡くなりになった後、2014年12月6日に千葉商科大学瑞穂会館で「毒島先生を偲ぶ会」を行ったが、この時学生、卒業生、商店街関係者、教職員など100人近い人が集まり、先生のお人柄を慕う声が多く寄せられた。このことから先生が人間としていかに素晴らしい方であったかということが窺われる。

偲ぶ会が終わり、国府台駅で1人イスに座って電車を待っている時、ふと下りホームと上りホームの屋根の間に見える空に目をやると、そこにフーッと毒島先生のお顔が見えて、「ありがとう」と言ってくれたような気がした。その時、本当に優しい先生なんだなと思ひ、先生を失ったことの大きさが深く心に浸みたのである。

毒島龍一先生を追悼する

小 川 雅 人

2014年9月15日、毒島先生の訃報を耳にした。暫くの絶句であった。体調がよくないことは以前から承知していたし、その覚悟もできていたはずであった。しかし、茫然自失の状態での時のことはよく覚えていない。

毒島先生とはお互い大学教員になる前からのおつきあいである。毒島先生は1985年中小企業事業団（現中小企業基盤整備機構）に入社された。その後千葉短大に移られ、千葉商科大学教授を歴任された。

毒島先生が中小企業事業団に勤務されていたころは、中小企業の高度化事業や中小企業大学校での研修・研究を担当された。筆者も当時東京都商工指導所で中小企業振興の役割を担っていた。共通する業務を担当していたことをきっかけに毒島先生との親交が始まった。毒島先生が先に大学に移られた後も研究を共にし、共著で書籍を5冊刊行した。特に毒島先生と福田敦先生（関東学院大学）と筆者の共著である『現代の商店街活性化戦略』は2005年度（財）商工総合研究所の中小企業研究奨励賞を受賞した。

毒島先生は中小企業事業団の中小企業大学校で中小企業診断士を養成する業務にも関与され、後に千葉商科大学大学院の中小企業診断士養成課程の開設・運営にもご尽力された。

毒島先生のお人柄は、物静かで温厚な紳士であったことは否定する人はいないであろう。大学での毒島先生を偲ぶ会に、毒島先生のゼミ生だけでなく、卒業生も駆けつけ、特にゼミ生は2, 3, 4年生のほぼ全員出席し、先生に哀悼の意を表した。如何に学生に慕われていたかを改めて納得できた。特にゼミではフィールドワークを重視し、商店街のイベントやまちづくりの集会などにも学生と共に大変よく参加された。学生がフィールドワークの経験を重ねることで成長していく姿をご自分の大きな喜びとしていたに違いない。

毒島先生の対外的活動は特に商店街との関わりが多い。研究の一環としても商店街や地域の経営者等の集まりにも時間の許す限り参加し、情報収集・専門知識を提供し、強い信頼関係を築かれた。特に墨田区橋銀座商店街の大和和道氏（千葉商科大学大学院客員教授）を中心とした昭和28年生まれを共通にした固い絆の集まりにも関与された（毒島先生は正確には昭和29年生まれであるが、メンバーに加わったのも毒島先生を敬愛する人たちの希望である）。この集まりは地域活動の推進の母体となっている。メンバーは墨田区の幹部職員、上場企業の常務等各分野で第一線にいる人たちである。また、他にも中小企業診断士、経営者、様々な分野の専門家などで構成する定例の研究会の立ち上げにも関与され、大学

教員としての役割を果たされた。このような学外のネットワークを持つことで研究や教育さらには、大学のアクティブラーニングなど外部連携推進に大きな功績をあげられた。

毒島先生は語学が堪能で海外の研究にも尽力された。数多く海外に出かけられ、研究を進めておられたことはよく聞いていた。その研究も道半ばでさぞ残念なことであったと思う。毒島先生の研究を凌駕することはできないとしても、研究分野に近い数多くの研究者とともに少しでも引き継いでいかねばならないであろう。残された共同研究者の1人として静かに誓う。

合掌